

山内祥史著 『太宰治の『晩年』 : 成立と出版』

高橋, 亮

九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程1年

<https://doi.org/10.15017/1901288>

出版情報 : 九大日文. 27, pp.50-53, 2016-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

◎書評

山内祥史著

『太宰治の『晩年』』

—— 成立と出版 ——

高橋 亮

文学における作家研究等において、対象に関する書誌を網羅的に把握する行為は、資料学的な見地に限らず、非常に重要な意味をもっている。作家個人もしくは特定の作品への考察を進める上において、初出や改版などに関する書誌情報は、体系的に理解しておくことが望ましい。なぜならば、そうした背景から注目すべき作家・作品の前後関係が現前化することや、それまでの研究で言及されてこなかった、もしくは誤った形で理解されてきた事柄が、改めて明らかになる場合があるからである。そうした観点からも、特定の作品集における情報を徹底的に詳らかにし、尚且つそこへと新たな視点を向ける本書の姿勢は、こうした手法の好例であり理想形であるとも言えるだろう。

太宰治の処女作品集である『晩年』を考察の中軸へと据えた本書では、主にその収録作品がひとつの創作集として結実するに至った経緯から、出版と前後した太宰の周辺の動きなどについて、『晩年』の刊行に関与した当事者達の発言や書面といっ

た様々な資料を基に明らかとしている。また、ここでは『晩年』を作品論的な見地から考察するのではなく、その出版における状況を徹底的に明確化することに重点が置かれている。そうした本書のコンセプトから、章立ても順に『晩年』における「収録作品の初出」「成立」「刊行にいたる経緯」「発刊」「献呈の辞」「広告」「出版記念会」「再版以降」という構成となっており、これらをほぼ時系列的に理解できる工夫が施されている。

そして、これらの内容に先立って著者は「まえがき」にて、太宰は「この世界とその変化とを成りたさせている深い力と交感できる能力」を有した人物であり、『晩年』とは「人間中心主義の近代的世界観の崩壊を示している」作品であると言及している。日本が太平洋戦争への道を辿りつつある、不穏な空気に満ちた情勢の中、確実な可能性として在る自身の「死」を、自己存在が本質的に内包する「無」を介して意識すること。太宰が『晩年』の世界に表出させた、極限まで無駄なものを排除した後に残る人間性の本質と真実は、現代世界にも通じる普遍のかつ深淵な意味を有しているとして、この作品へと今一度眼差しを向けることの意義を論じている。

こうした意識の下に著された本書では、まず一章にて『晩年』に収録された短編の初出時期を中心に扱っている。ここでは、太宰の死後すぐに作成された「日本読売新聞第四四七号」（昭和二十三年六月三十日付発刊）特集の「作家太宰治」に添えられた「太宰治主要作品年譜」を取り上げ、そこに記載されていた書誌情報との誤りが、どのような経緯で修正されていたのかを順序立

てて説明している。「太宰治主要作品年譜」にて記載された、『晩年』収録作品の初出情報は、十八編中十編に誤謬があった。それらの記載上での誤りは、同年に新潮社より出版された田中英光編『自叙伝全集太宰治』（新潮社、昭和二十三年）を筆頭に、太宰夫人・津島美知子による言及が為された「後記」収録の『晩年 太宰治全集第一巻』（創藝社、昭和二十七年）、六編の初出情報に初めて改正の行われた『太宰治全集第一巻』（筑摩書房、昭和三十年）、それまで看過されてきた「盗賊」の初出情報の誤りを初めて改めた『太宰治作品事典』（國文学、第十二巻第十四号「特集太宰治の文学、昭和四十二年」）などを通して、現時点での正確な書誌情報へと到った過程が述べられている。また、著者は従来では「週刊誌」として捉えられてきた「列車」の初出媒体を、

新聞「東奥日報」の日曜附録週刊紙であるという点から「東奥日報」に置き直すなど、『晩年』の初出情報における新たな視点を取り入れるといった試みも行っている。一方、この章では『晩年』収録作品の配列構成の他、これらとほぼ同時期に発表された「ダス・ゲマイネ」が未収録である理由について、いずれ稿を改めて述べるとされている。だが、こうした疑問についても、本書におけるその他の『晩年』への卓見と合わせて示して欲しかったというのが、一読者としての率直な感想でもあった。

続く二章では、前掲の内容を踏まえて太宰の初期作品の一群が『晩年』として成立した時期と、その経緯について説明が行われている。著者は太宰の自伝的小説「東京八景」や、『晩年』

掲載作品の執筆時期についての、同人誌「海豹」を始めとした太宰の周辺に在った人々の言説を引き合いに出しながら、『晩年』掲載作品の具体的な執筆時期や地域を推察している。また、これらと並行して創作集の表題が『晩年』に定められた時期や内実についても触れられており、「もう、これで、おしまひだといふ意味」による「唯一の遺書」から太宰はこの名称を用いたとされている。それに対し、「早熟の才能の疲労の影」を見る川端康成や、「作者の健康も大きな憂慮」であったとする斧稜、「青春の悲哀、人生の黄昏」からの影響を論じる村松定孝など、同時代の批評においても様々な定義付けが為されていたという事実は、太宰研究という枠に収まらない、非常に面白く興味深い事柄に思えた。

また、この章では「東京八景」に記述の見られる、『晩年』の作品を収めたとされる「紙袋」についての考察が為されている。そして、『晩年』と銘打たれたこの紙袋に収められていたとする、昭和九年時点での「十四編」の作品を明らかにする著者の試みは、正に圧巻の一言に尽きる内容となっている。刊行された『晩年』へと実際に収録されている作品は、「列車」「魚服記」「思ひ出」「葉」「猿面冠者」「彼は昔の彼ならず」「ロマネスク」「逆行」「道化の華」「玩具」「雀こ」「猿ヶ島」「盗賊」「地球図」「めくら草子」「陰火」の十五編であり、前掲の記述とは数が合わない。ここで著者は初めに、「道化の華」が他の刊行本である『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』（新潮社、昭和十二年）に収められた長編「虚構の彷徨」の一部であったことから、

この作品が除外されていたとする仮説を立てる。しかし、同作は「東京八景」の執筆時期までに出版された初版（昭和十一年）、再版（昭和十二年）、改版（昭和十六年）の全ての『晩年』に記載されている点から条件に合わないとして、以降五十頁近くに渡ってこの問題を検証していくこととなる。その具体的な方法については紙幅上の都合から割愛するが、当該の期間に関する太宰自身や関係者の発言を参考に、『晩年』収録作品の詳細な執筆時期を特定していくことが主となっている。また、ここでは複数の掌編をまとめてひとつの作品としているものもあることから、これらを分けて数えるべきかといった構成上の問題も視野に入れながら、様々な可能性を検討していく。最終的には、「東京八景」中の記述や太宰関連の書簡・言説から、「めくら草子」の一編が昭和十年頃に執筆されたと推定され、この作品を除いて十四編と数えることに不都合はない点から、「東京八景」中で言及されている「晩年」とは「めくら草子」以外の作品であると結論付けられている。無論、著者も本文中で述べているように、「東京八景」の記述が厳密であるという傍証はなく、同時に「めくら草子」を除外する方法が、真に事実を指しているかと確定するのも困難なように思われる。しかし、この結論に至るまでの考察において、多数の資料を比較しながら様々な仮説を事細かに検証していく行為は、本書における著者の主張を強く裏付ける力を有している。こうした、見方によっては無駄で煩雑とも受け取られかねない作業は、しかしそれまで見過ごされてきた隠された事実を明らかとし、対象の理解や研究

の深化の一助ともなる意味をもち得ることを示しているように思われた。

三章では、こうしてまとめられた『晩年』が実際に刊行されるまでの流れを、太宰を始めとして檀一雄や浅見淵など、出版に携わった人々の動向を中心として説明している。ここでは、『晩年』出版のために奔走する関係者や、初の創作集の刊行に切実な思いを抱く作者の様子が、細かな期日と合わせて紹介されている。また、浅見淵の証言として初版『晩年』の装幀は太宰の意向から、作者所有の淀野隆三・佐藤正彰共訳『失ひし時を求めて第一巻スワン家の方』（武蔵野書院、昭和六年）を踏襲したとされており、書籍としての『晩年』の体裁にも、太宰の意志が強く反映されている事実は注目に値するものだった。

四章は、発刊された初版『晩年』の体裁や構成に関する詳細な情報が記載され、初版本にのみ所載された口絵の作者近影についての、様々な人々の印象記を引用し列挙している。更に、本章では佐藤春夫、井伏鱒二による言説の載せられた書帯についても触れられており、現在では原典に当たった確認が難しいこれらの説明は、後続の太宰治研究においても特に有用であると思われる。

続く五章では、『晩年』発刊時に関係者へと配られた献呈本に載せられた、太宰自身の肉筆による献呈の辞を扱っている。ここでは、従来の研究で明らかとされたもの他に、著者である山内氏自身の手によって収集されたものも紹介されている。著者はこれらをして、「遺書代わり」の本の献辞だからこそ、

「いかにも太宰らしい」忌憚の無い文句になっていると、その特徴を述べている。

第六章では、「帝国大学新聞第六百三十四号」（昭和十一年七月六日付発行）や「文筆創刊号」（昭和十一年八月一日付発行）などに掲載された『晩年』の広告を取り上げている。通常、売り文句としての誇大表現に偏る傾向にある宣伝文は、その性質から文学研究の資料としてはどうしても扱いにくい位置にある。しかしながら、宣伝文の依頼先へと自身を「天才」として評するよう頼み込んでいる太宰の発言は、出版記念会に前後する太宰の動向について、客観的な証言を列挙した本書の七章の内容と共に、作家研究の観点からしても充分な意義と価値を含んでいるように窺えた。

終章となる第八章では、後年に刊行された再版、改版の『晩年』における体裁と構成を四章と同様に解説し、これらの相違点や追記された太宰の宣伝文について説明をしている。加えて、本書刊行時までに『晩年』が収載された書籍のリストを挙げ、本作の時系列的な変遷を容易に追えるようになっていいる。

そして、本書の末尾には参考資料として『晩年』作品の手引きが載せられているが、ここでは作品別の概要の他に、これまでの主立った評価の例と、著者による新たな作品論への視点が示されている。

著者は「あとがき」において、本書の「まえがき」の初出は「樟樹第十二号」（香川県立観音寺第一高等学校、昭和五十八年六月二十日付発行）に「太宰治の文学について」の標題で掲載された、

同校の高校生を対象にした講演を下地にしていると語っている。その際、著者は『晩年』に重点をおいて「話をしたとしているが、太宰はこの創作集を形にするまでに「十箇年を棒に振つた」と語っており、その『晩年』のために浪費した期間の始点とされる年齢は、講演での聞き手である高校生とほぼ重なっている。

元々は文学とは何ら接点のない分野に在った著者は、大学時代の体験を機に「未知の世界」を有する太宰の作品に魅せられたと述懐している。『晩年』の作品世界へと表される「人間中心主義の近代的世界観の崩壊」は、発表から七十年以上が経過した現代においても、その実態を示す秀逸なものであるとされている。だからこそ、この時代に再度『晩年』を読み直すという行為には意義があり、特にそれはこれからの未来を担っていく若者達にとって、貴重かつ重要な経験になるとも捉えられる。世界の変化を魂で敏感に感受してしまいが故に、激しい苦悩に満ちた青春を送ることとなった太宰治。その悲惨でありながらも、人間の核心を突く人生観に彩られた『晩年』に接近する経路を、本書において読者、引いては『晩年』執筆時の太宰と同じ年代にある者達へと明示する。これは、「太宰治研究のバイオニア」とされる本書の著者であるからこそ、成し遂げることができた類い稀な発想であり、試みなのではないだろうか。

（二〇一五年十一月 秀明出版会 二六五頁 二五〇〇円＋税）

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程一年）